

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第74回



何度説明しても理解できない

★何度説明しても理解できない

指導者の皆さんは、説明したことが理解できていない子どもたちに困ったことはありませんか？

理解できていないのは話を聞いていないからで、“手いたずら”している子の手を止めさせ、おしゃべりしている子を注意し、全員にこちらをしっかりと見させてから、再度、説明を始めます。そして話が終わった後、もう一度やらせると、それでも理解できていない子が2～3名いることに愕然とします。

確かに、全員こちらの目を見て、説明をしっかりと聞いていたことは、話をしながら確認しました。いったい、子どもたちに何が起きているのでしょうか？

★クラスに5人

児童精神科医の宮口幸治氏の著作によると、1950年代には知的障害の定義として、“知能指数 (IQ) 85 未満を知的障害とする”としていました。しかしながら、「IQ 85 未満を知的障害とする」と決めてしまうと、知的障害と判定される人が全体の16%くらいになり、あまりに人数が多すぎ、学校などの支援現場の実際に合わないとの理由から、知的障害は、「IQ 85 未満」から「IQ 70 未満」に引き下げられたという経緯があります (図)。

IQ 70～84 の「境界知能」と呼ばれる子どもたちは、かつての定義に当てはめれば「知的障害」と判定されていたかもしれない子どもたちで、全体の約

14%、つまり 35 人のクラスだと 5 人いることになります (図)。彼らは授業についていけず、対人スキルも低いことが多いため、人間関係でも苦しい思いをしていることになります。

★普通学級と特別支援学級

小学校には、普通学級と特別支援学級があります。主に、IQ 80 以上は普通学級、70～80 は特別支援学級、70 以下は特別支援学校になります。しかしながら、これらはあくまでも目安であり、IQ だけで決めるのではなく、幼稚園からの情報や就学検診の結果から総合的に判断し、最終的には保護者が普通学級と特別支援学級のどちらにするかを決めます。よって、普通学級に境界知能児がかなりの割合で含まれることとなりますので、特別支援学級にいる子より、普通学級にいる子の方が“支援を必要としている”といった逆転現象も少なくありません。

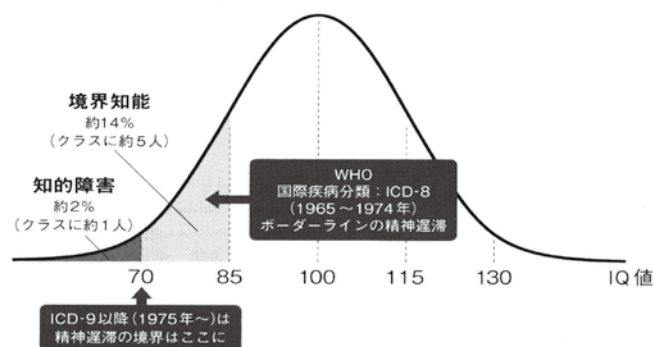


図: IQの分布と境界知能

(「境界知能とグレーゾーンの子もたち」扶桑社より転載)

IQ 70～85 くらいの年長児を持つお母さんは、普通学級と特別支援学級のどちらにするべきか迷います。「本人が勉強で苦労しないように、支援学級に入れて手厚い支援をお願いしたい」と考えるお母さんがいる一方、「幼稚園で一緒に遊んできたお友達と同じ普通学級に入れてあげたい（自分の子は支援を必要としていると認めたくない）」と考えるお母さんもいることでしょう。

よって、グレーゾーンの子どもたちにとっては、普通学級と特別支援学級のどちらを選択するかで、その後の学校生活や将来までも大きく変えてしまう分かれ道となるのです。

★事実をまず知る

道場の会員募集チラシに、「集中力を養います」「黙って話が聞けるようになります」などといったキャッチフレーズを入れてチラシを作りますが、学校生活で困っている境界知能児の保護者がそのチラシを見て、高確率で道場の門を叩くことになります。

よって境界知能児の割合は、学校の普通学級より、道場のクラスの方が高くなっている可能性があります。そんなことは露知らず、指導者は説明が理解できない子たちに、日タイライラすることになります。そして、「やる気がなく、ふざけている」「話を聞いていないから」などと結論づけて子供たちのやる気の問題だと考えます。

一方、優秀な指導者に限って、「子どもたちは悪くない、きっと私の指導力不足だ」と自分を責めてしまいます。

指導者は“理解力の著しく低い子がクラスには一定数いる”という事実をまず知ることが大事で、その子たちを支援するような指導の工夫が望まれます。

また、根本的な解決として、学校での普通学級と特別支援学級の区分け基準を再検討し、気付かれることなく、見逃されている支援の必要な子たちにスポットライトをあてる必要があるでしょう。もしくは、支援などはせずとも、クラスメートや担任の先生も含め、自然とお互いが助け合える、境界知能児が困らないシステムを導入することが望まれます。

【参考資料】

- *1 『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書
- *2 『境界知能とグレーゾーンの子どもたち』扶桑社

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館／静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その 24

■選択肢は多い方が良い？② ～たくさんあると決められない～

前号で、3つの選択肢があると真ん中を選んでしまう“極端回避性”についてお話ししました。2つの選択肢では安い方を選んでしまいますので、選択肢をもう一つ増やすことで真ん中を選んでもらうよう、こちらの予測したとおりの結果を出すことができました。今回は、逆に、稽古日数と月謝の選択肢がたくさんあるとどうなるか考えてみましょう。

週1回会員	3,000円（週4回の稽古日から1回選択）
週2回会員	5,000円（週4回の稽古日から2回選択）
週3回会員	7,000円（週4回の稽古日から3回選択）
週4回会員	9,000円（週4回の稽古日、何回来てもOK）
週5回会員	12,000円（何回来てもOK & 個人指導付）

いよいよ、体験入門の期間が終わって、ママさんが入会手续にきました。

館長先生 「お母さん、どのコースを選択されますか？」

ママさん 「えっ、随分たくさんあるんですね」

館長先生 「当道場では、皆様のニーズに合わせて多様なコースを準備させていただいておりますので、必ずピッタリのコースをお選び頂けると自負します」

ママさん 「えっと……。それでは、すぐには決められないので、家に帰って主人と相談いたします」

館長先生 「えっ!？」

待てども待てども、そのまま二度と道場に連絡が来なかった、なんてことになってしまいます（私の実際の体験談です）。あまりに選択肢が多すぎるのも、自由な“選択の権利”と引き換えに、迷いや混乱が決断を妨げてしまうのです。これを“決定回避の法則”と言います。相手のことを考えて選択肢をたくさん用意しても、返って決断を鈍らせてしまうこともあるのですね。

よって、コースの選択は“極端回避性”を利用した3択くらいにするのがベストだと考えます。